

追 悼

成人・高齢者リハビリテーションのパイオニア 服部一郎先生を悼む

上 田 敏

敬愛する服部一郎先生（長尾病院名誉院長）が本 2009 年 9 月 14 日に享年 92 歳でお亡くなりになった。先生の優れたご業績とお人柄を偲んで追悼のよすがとしたい。

先生は 1917 年 2 月に福岡にお生まれになり、1941 年に九州帝国大学医学部を卒業され、内科、なかでも物理医学（当時は物療内科、温泉医学などとも呼んだ）を専門に選ばれた。1944 年から別府の九州大学温泉治療学研究所に勤務し、物理医学の研究、特に別府温泉の泥を用いた温熱療法である「鉱泥療法」を深く研究された。これが姿を変えたものが、現在、リハビリテーションで広く使われているホットパックである。

1948 年には新設の九州労災病院（北九州市小倉区）の内科部長となられた。計画段階から深くかかわっておられたらしく、後年、「建設予定地を見に行ったら草ぼうぼうで、それをかき分けかき分け見てまわりました。まさに『草分け』ですよ」と笑っておられた。先生はフランス語に堪能で、1958 年にはフランスに留学してリハビリテーション技術を徹底的に学ばれ、帰国後、九州労災病院に理学診療科を創設され、部長となられた。

私が先生にはじめてお会いしたのは、他に詳しく書いたが（「リハビリテーションの思想」、医学書院、1987、2004）、1962 年の春の神経学会であり、特に決定的だったのは、その秋に九州労災病院を訪問したことであった。九州の炭鉱の落盤事故による脊髄損傷者や脳卒中患者を対象に、運動療法だけでなく、作業療法や多彩な ADL 訓練が行われていた。特に畳敷きの和室の ADL 訓練室があって、日本家屋での ADL 訓練が徹底して行われていることに驚嘆した。その 2 年前から高齢者のリハビリテーションに手探りで取り組んできた私であったが、「自宅に帰す。しかも日本家屋に」ということは新鮮だったのである。私はその後 NYU に留学し、リハビリテーションの最新の技術は学んできたが、リハビリテーションの思想と技術の基本の基本は服部先生から学んだと言って過言ではない。

先生は 1965 年に長尾病院長となり、脳卒中を中心にますますリハビリテーションの実践を深めるとともに、リハビリテーションの普及のための執筆活動を旺盛に行われた。その最大のものが「リハビリテーション技術全書」（医学書院、1974）であり、1,000 ページを越える大冊で、その後もこれを越えるものはない。

時期は前後するが、日本リハビリテーション医学会創設にあたっての先生の知られざる貢献も大きかった。1963 年 4 月の日本医学会総会（大阪）の機会に、リハビリテーション医学会設立をめざす動きが「内科系」と「整形外科系」の 2 つあったが、この 2 つを対立でなく協調・融合の方向にもっていくうえで、服部先生の実績は、整形外科側の小池文英先生のそれとともに非常に大きなものがあった。同年 9 月の学会発足時には先生は理事就任を遠慮されたため、この功績がほとんど知られていないのは残念である。

先生は美術を好まれ、特にロートレック、青磁、広重を好まれた。私も先生から青磁の壺と広重の富士三十六景の 1 枚をいただいております、家宝と思っています。

心からご冥福を祈る。

（うえだ・さとし、日本障害者リハビリテーション協会顧問、元東京大学教授）